



### 「吾平町麓 十文字付近」

昔 昭和52年3月



今



吾平町内で初めて信号機が設置されたのが麓の十文字。昭和52年3月のことです。しかし当時はまだ歩道が無く、お店のすぐ目の前を道路が通っていたことが分かります。現在のように広い歩道ができて、美しい町並みになったのは約20年前のこと。一帯の道路の改良工事は昭和63年4月から始まり、平成9年7月に完成しました。



## カノヤタイムトラベル

昔、鹿屋で起きた出来事にクローズアップ！

### 串良の水田を案じた斉彬

なりのあきら



串良川流域に広がる水田

島津斉彬と言えば幕末の名君として、集成館事業に代表される近代化政策を押し進めたことで有名ですが、農業政策に力を入れたことでも知られています。嘉永5年（1852年）8月、斉彬は藩主就任後初めて江戸参勤へ出発する際に、9条からなる覚書を出しています。その第1条には、国の基本は「農」であり、農民の困窮を防ぎ、人口を増やして勸農に努めるべきだとあります。

この江戸参勤の道中、串良近辺で非常に大きな風雨災害が発生したことから、同年9月、斉彬は国元にいる弟の久光に、串良近辺の被害の調査や対応について指示した記録が残っています。（左写真）  
また斉彬は新田開発も積極的に進めました。その中で串良の湿田を乾田に変える方策を検討してい

ます。斉彬の言動を後年まとめた『島津斉彬言行録』には、「串良の沼田は非常に深く、作付けに適していない場所が多い。沼田に樹木を埋めて乾田にする方法があるが、串良は人が少なく樹木も乏しい。だから先に人を移住・繁殖させ、沼に適応するイグサを植え付け、徐々に乾田化していく」といった記述があります。「農」を国の基本と唱えた斉彬らしい言葉です。  
しかしその後も、「水田広しといえども多く下田にして米穀上品ならず」と言われ、状況は変わりませんでした。実際に農業の改善が試みられるようになるのは、明治10年代後半以降のことです。



▶「風雨ニテ串良辺余程痛ミ」（『島津斉彬書状参勤中途播州正条ヨリ』）

※鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵 玉里島津家資料

※播州正条 Ⅱ 現・兵庫県たつの市